

難波西鶴と

海の道

【95】

森田 雅也

西鶴の『好色五人女』(貞享3(1686)年刊)巻一は、有名な姫路の「お夏清十郎」物語です。後に近松門左衛門までが『五十年忌歌合伝』(宝永4(1707)年)(人形浄瑠璃)として上演したのですから、さぞかし、当時、世間の耳目を驚かせた事件だったのでしょう。

物語は室津の遊郭から始まります。室津の地は江戸

時代、朝鮮通信使も立ち寄る瀬戸内海航路の要衝でした。また、古くから遊女の発祥地としても知られたにぎわいの地でもありました。

醸造業和泉屋の息子清十郎は、この地の遊女たちと昼夜を分かたず遊ぶ若旦那。男がよりよく遊女たちを夢中にし、室津一の遊女皆川とは深い仲でした。しかし、遊蕩おまらさず、ついに父和泉屋に勘当されま

が、皆川の先立つ死で幕を閉じます。

傷心の清十郎でしたが、商人として一から出直し、姫路の但馬屋の手代におさまり、めきめきと手腕を発揮します。主人からの信頼も厚く、店の者からの評判もよく、特に店の女性の使用人たちは乳母に至るまで思いを寄せていました。

ある日、彼女たちが清十郎の着物を洗濯すると、帯の中から、多くの室津の遊女たちからの恋文が見つかり、女人にこれほど好かれる色男と騒いでいたところ、但馬屋の主人の妹お夏も加わり、恋心をかき立てられます。お夏は京都鴨原の大夫にも勝るとも劣らな

『好色五人女』の「お夏清十郎」

い美女。男の容姿を選び、適齢期の16歳ながら、まだ縁づかずいました。

清十郎もその美しい姿に恋焦がれ、2人は相思相愛。たまたま、加古川尾上での但馬屋あけての花見の機会を利用して、初めての契りを交わします。2人の恋は暴走し、姫路飾磨の港から乗合船で駆け落ちしようとしたが、同乗者の思わぬ失態がもとで未遂となります。そんな時、店の700両が紛失し、清十郎は冤罪のまま、処刑されてしまいます。座敷牢の中でその死を知らないお夏。次回に続きます。

(関西学院大文学部文学言語学科教授)

世間の耳目驚かせた